

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 東京労金本店 No 1154163

FAX(03)3299-5367

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

完全に破綻した国鉄「分割・民営化」	2
「単独新党」論急浮上	3
——社会党久保推進派追い詰められる——	
労働者のたたかいをどうつくるか 坂牛哲郎	6
——我らは何をなすべきか 変革主体の形式(二)——	
空の安全は大丈夫?	10
——アルバイトスチューデンスの問題点——	
◇投稿◇	
向坂逸郎先生の思い出	14
富山 実	
読者からのおたより	15
編集部だより	16

◇好評発売中 上野建一著 社会通信刊◇
 政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて
 四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

旬刊 社会通信

NO.620

一九九五年二月二日

一九九五年二月二日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

■巻頭言■ 完全に破綻した国鉄「分割・民営化」

運賃値上げ、つげは国民一人当たり二十万円の税金に

国鉄「分割・民営化」の破綻が明らかとなった。片方、全通、全電通といった組合は、「分割・民営化」あるいは「民営化」を回避することが至上命題と、「護憲」を口にしなが
ら、労働者の基本権を次から次へと売り渡している。「護憲懇談会」の同志によれば、自
治労中央すらも変わってしまったのでは、ということだ。「護憲懇談会」は十一月二日、
自治労会館大ホールで「いま、めざそう『護憲の党』集会」（本誌第六一九号参照）を予
定した。ところが、十月二六日、自治労会館から「集会のチラシを見た結果、自治労の方
針と違う。だから会場を貸せない」と連絡があったそうである。「貸す、貸さない」の結
論は十月三〇日ということだが、全電通からはじまった「選別」が自治労にまで及ぶとは
独占および社会党を政権党にとりこんだ総資本は「左うちわ」ということだろう。

連合中央の墮落と対照的に、日本独占資本の矛盾は頂点に達しつつある。銀行、証券会
社の腐敗、墮落に示される「金融システム」の動揺がその典型だが、国鉄「分割・民営化」
の破綻が、崩壊への序曲をかなでることになりそうだ。

第一。八十年代、時の権力は国労が残るとも、国鉄闘争団がこんなに生き生き活動する
とも予想しなかった。上野公園から始まった「国鉄闘争勝利をめざす団結まつり」は、年
を追うごとに拡まりを増した。地労委闘争では連戦連勝。新宿車掌区事件に次ぎ、「神奈
川不採用事件」でも二七日、完勝とはいえぬが、国労全面勝利の中労委命令となった。

二日後の「団結まつり」で闘争団、国労、支援する仲間の顔の明るいこと。「まつり」
の天候には毎年ヒヤヒヤドキさせられる。この日もそうだった。前日の天気予報は曇
り後雨。重装備で出撃。しかし正午前後から太陽が顔を出し、「天まで国労に味方、勝つ
ことまちがいなし」とは、すべての参加者の感想だ。規模も一回り大きくなった。支援団
の拡大、争議団の「まつり」への結集、そして地域住民の参加者の拡がりだ。でも一抹の
不安はある。若い仲間の参加は心強いが、闘争団の仲間の髪に白いものが目立ち
始めたことだ。「勝つ」、その気合いが何よりも重要だ。

他方、運輸省、J R、国鉄清算事業団に未来はない。

第一。借金はふえつづけ、売り食い状態が常態となったことだ。清算事業団はJ R東株
営団地下鉄の出資分、所有地八千八百ヘクタール中五千ヘクタールを売り払った。ところ
が、借金は減るところかふえるだけ。「分割・民営化」時、二十五兆五千億円が今では二
十六兆九千億円にも膨張している。

第二。三島会社は補助金付与でも赤字に転落。運賃値上げが必至となったことだ。三島
が黒字になるとはだれも思っていなかった。だから一兆三千億円の「基金」が持参金とし
て付与されたけれど、「金融システム」救済のため公定歩合は〇・五%と世界資本主義史
上最低となり、三島会社の収支をまかないきれなくなったというわけだ。運賃値上げは
いたしません」が、「分割・民営化」の公約の大きな一つ。今、それが破綻した。

第三。運輸省、J R、清算事業団がさきまがいの商売をはじめたことだ。北海道、九州
を旅した人は、列車がとまるたびに「売地、清算事業団」との看板を目にされているはず
だ。企業はむろん自治体も買わない。用地は荒れはてるだけ。これを都会の労働者に切り
売りはじめたことだ。マスコミは一大快挙のように報じ、「買い」をおおっている。東京
では一坪百万単位、北海道では数千円からせいぜいで数万円。人の弱みにつけこんだ悪徳
商法とはこのことで、新たな問題が噴出する可能性もある。

以上のように、「分割・民営化」は完全に破綻した。ムキダシの資本主義はこれまで論
じた犠牲の転嫁だけでなく、国民一人あたり約二十万円の犠牲を加えるだろう。その決断
の時期は来年にせまっている。

「単独新党」論急浮上

——社会党久保推進派追い詰められる——

十一月結成に追い詰められた久保派

迷走を続けてきた社会党の新党問題は、「新党さきがけ」が社会党との合同を見送ったことで、久保執行部は追い詰められたことになり、「党単独の新党」の挙に出ざるをえなくなつた。いわゆる看板の書き替えの方式で十一月中の結成ということである。しかしこれは右派新党推進派の独走になり、場合によっては分裂に近い対立抗争になりかねない方向である。

まず急浮上してアワのごとく消えた「武村新党」は、自治労、全電通などが画策したもののだが、これは明らかに「推進労組側」のアセリから出たもので、なんとか年内新党をというアセリから理念も政策も捨て、思惑だけを先行させたものであった。

もともと「さきがけ」が社会党と組んで合同するということには無理がある。本誌で度々指摘してきたように、①さきがけはもともと自民党崩れの集団（党という組織にはなっていない）であつて、議員それぞれの後援会が選挙母体で、体質的には自民党から一歩も出ていない。②保守的議員集団であるから、彼等の政治行動の基準は、次の総選挙（小選挙区制初の）で生き残れるかどうかによる。その意味で展望のない社会党と合同してもなんのプラスもないことである。大労組幹部のいう「労組票の支援」も、地域では労組全体としては保守色が強くなったとはいえ選挙で動ける労組は「社会党らしさ」を支持しており、保守のさきがけとはなじまない。③小選挙区の現場では、自民と新進の両党から働きかけられているところ、激しく対立しているところ、など「さきがけ」の地盤が安定していない。次の総選挙で消滅する可能性さえある（現在衆院で二十二二人）。

武村正義さきがけ代表を、リベラル新党の党首へという、社会党側（労組主導、村山首相も支持）の提起に二十五日のさきがけの論議は、激しく紛糾した。さきがけには、小党といえども「派閥」ができていて武村代表の求心力がそう強いわけではない。それでは鳩山代表幹事が横路氏等と派手に動いているが信望があるのかというところでもなく、いよいよのとき彼と行を共にするのは数名だろうといわれている。武村代表に次ぐ求心力は田中秀征代表代行であるらしい。

いずれにせよ「さきがけ」の大勢は、自民党などとの選挙協力によって独自性をもって生き残ろうということになっている。社会党の新党と合同しようとすれば分裂することになる。

久保書記長が、二十七日の臨時中央執行委員会に提起した社会党単独新党論は、党「丸ごと」となれば、年を越して、総選挙直前までひきづられてしまい、事実上新党はできなくなるかと判断していることから出発している。久保氏の考えの基本は、①「さきがけ」が相手にならない以上、まず社会党単独で先行して、横路派との合流を来春に行う。②このままでは、大労組幹部の新党熱も低下し、久保氏自身の信用も完全に失い書記長辞任に追い込まれる。③社会党の都道府県の本部段階の新党参加支持が約七割台になったこと。④新党慎重派といわれてきた村山グループも新党年内結成やむなしに傾いていること、など

であろう。

久保書記長を元気づかせたもう一つの動きは、二十六日の午後、「民主リベラル新党推進議員懇談会」が結成総会を開いたことである。この懇談会は旧山花グループを中心としたもので最右派の議員集団の再結集である。結成に参加したのは衆院から二十四人（代理人）と参院から十九人（同七人）となっており、代表に上原康助・党副委員長、代表代行に佐藤観樹・党副委員長、田口健二衆院議員、及川一夫参院議員（全電通出身）の三人となっている。

この最右派議員集団は、久保氏が二十七日に出した党単独新党論を全面的に支持し、十一月中の新党結成をバックアップしようというもので、連絡事務所をもうけ、全国の落選中の候補者にも呼びかけ、地方にも新党体制を広げようとしている。

しかし久保単独先行新党論が社会党全体のものになるとは考えられず、左派護憲派の結集も進んでいるだけに、各都道府県本部内の対立・抗争の激化も当然考えられ、一般党員、活動家を無視した「新党」推進は結局党分裂を招き、村山連立内閣の崩壊につながることになる。左派・護憲派も「丸ごと」といって、第三保守党である新党に参加できるわけはなく、全国的に「第三保守には入党しない」という解党阻止のぎりぎりのたたかいが要求されており、いよいよ奮起する時が来ている。

左派の一部がなぜ、新党推進か

リベラル新党は十一月結成にあせればあせるほど、主体である社会党内のコンセンサスが得られず、対立、離党、分裂を生み出すことになっている。社会党的な理念と「社会党らしい」活動と組織づくりをますます失ってゆく実態だが、そのなかでも都道府県段階の左派系の幹部、専従者の一部が、まだどういう党になるのかわからないのに、「新党やむなし」「労組がここまで賛同しているなら」などという方向になってきている。今の時期に新党を推進する要素は何かと見るならば、第一に、大労組幹部が各単産を通じての圧力（中央本部と各級議員へ）である。第二には、小選挙区制による新しい総選挙が近いということ（実際には明年の秋以降の予想）。第三には、右派推進派による二度にわたる（党内民主主義を無視したものが）全国大会の決定。第四には、国会議員の大勢としての新党促進論と左派系一部の「新党へ党丸ごと」移行論の台頭、であろう。

しかし党内では島根の「解党反対」と広島県本の「論議を充分行って意思統一」などに代表される新党に対する根強い反対がある。その反対の声として大きいのは「社会党的なもの、社会らしさは完全に無くなる」「勤労者による抵抗をもとにした大衆運動を認めない党となり、働く各層の要求が通らない」「合理化と大失業の時代という「転換期」をたたく抜く党にはならない」「新党は労働組合の大量入党（名目だけの党支配の都合せ）によって組合党となり大衆性を失う。」「反原発、反基地、反自衛隊、軍縮などの平和運動ができない党となる」「社会党のかつての基本政策は完全に捨てられたままになる」「党活動によって大衆の意識の向上をはかることは基本的にできなくなる」。そして「結果」として「選挙党、議員政党となり、活動家党員をはじめ「運動家」となって日本の変革を望む党員は激減する」、機関紙不用論となり、現新報は消滅する。この党はまさに「第三の保守党」である。

いわゆる「地方グループ」といわれた県本段階の書記長クラスの大勢が「新党移行」に

傾いていったのはどうか。それは九月の全国大会に起因している。もう一度大会をふり返ってみよう。地方グループを含む村山派が、新党問題にとつてとくに重要な九月大会で、脆くも敗れた。決議と人事（副委員長）の二つで敗れている。決議の内容は、普通の党内デモクラシーのある党ならば当然の事項である。その内容を要約すれば、①新しい政党の綱領、規約、重要政策、組織原則、運動の基本等の策定などについては、党が主体的に行い、党内で論議し全国大会か中央委員会の承認を求めること。②分権の党にふさわしく中央地方が一体となって、地域の課題や党の歴史を継承し、総選挙準備と並行してすすめること。③理念は護憲の立場に立つこと、であった。この内容は、新党結成を認めたいうえでの新党づくりについての若干の補強といえるものであって新党推進派にとつても受け入れておかしくないものである。しかし結果は新党結成を認めての提案すら拒否することになったわけで、久保書記長をはじめとする新党推進派の狭量な態度と非民主的な方向が図らずも明らかになったわけである。

それは人事にも現われた。村山委員長（首相）派から副委員長を出すことは認めないということ、久保書記長は山口鶴男前総務庁長官に反対して佐藤観樹元自治相を選挙で勝たせた（久保氏は山口氏が副委員長になれば「書記長を辞める」と恫喝の言動を行ったと報じられている。結果は佐藤・百七十二、山口・百七十）。

この敗北の結果は、全国的に原本段階において新党への取組みを推進する機運を醸成することになった。唯一頼りにしていた村山派の慎重論も腰砕けになり、丸ごとならば看板の掛け替え的新党でもやむをえない、と流されて行った。もともと慎重論というのも曖昧な態度で、村山内閣を維持し支えるということ優先させることから社会党を消滅させかねない新党問題もその駆け引きに使ってきたといえる。村山首相兼委員長の新党問題に対する発言は、その側近といわれる人達と共に指導力を欠いた場当たりのものがあった。

党北海道本部が全国にさきがけて「同本部丸ごと」新党移行を決めたのも大きく影響した（九月一日）。これは党外の「リベラル勢力」を主体にした横路方式ともいえる第三の保守党づくりへの迎合であった。今度の全国大会では、地方グループ（二十四県本）の決議案にも賛成していないことからその本質を明らかにしている。

しかし一方でいわゆる「地方グループ」もすでに八月段階で「新しい政党づくり推進本部」の部会に参加、「丸ごと新党への移行ならやむをえない」という立場に追い込まれていたのである。新しい政党づくり推進本部は（本部長村山委員長）、五月の第六十二回臨時全国大会の新党結成の方向が決まったことを受けて六月に設置され、その中に七つの部会がもうけられた。その一つに「組織・自治体議員共同部会」があつて、その構成メンバーは中執六人、ブロック代表十一人、地方議員二人となっている。ブロック代表十一人のなかには「地方グループ」の主な県本の書記長が組み込まれており、九月八日の部会には「新しい党の組織について」と「新しい党の組織像について」の提案がありその討議が行なわれている。この部会は地方組織（県本）の新党反対と不満に対してのガス抜き役割を果す結果になったのである。

（政権研究班）

◇我らは何をなすべきか第二部◇ 労働者のたたかいをどうつくるか

変革主体の形成(一)

アジア分業体制の確立

第一部、「深化する世界長期不況」(本誌第六一七、八号参照)で述べたように、日本資本主義は七三年、世界不況の中で、六十年代種をまいた、能力主義管理体制、特に小集団活動を基礎にして、ME合理化に成功した。

激しい人員整理、国内市場の狭小化により、産業構造は急速に貿易依存化型に変貌した。合理化↓輸出拡大↑円高↓合理化のいわゆる「悪魔のサイクル」がつけられた。日本の労働者は、働けば働くほど、苛酷な労働、首切り、配転に苦しまざるを得なくなったのである。

しかしこのことにより、日本の巨大企業もまた深刻な矛盾にまきこまれた。まことに資本主義とは皮肉なものである。搾取の強化に比例して、利潤率がおちこんできた。致命的な矛盾、危機である。

いま、日経連が提起している、「新しい日本的経営」は、せんじつめていえば、日本国内で失敗した。「悪魔のサイクル」をアジア規模に拡大せんとするものに外ならない。

日経連報告は「産業空洞化を防ぐため、産業構造を転換せざるを得ない」と述べている。しかし九五年、通商白書は「わが国の企業は、あらゆる利用可能な資本・技術をといた、生産要素の国際的動員により、市場のニーズに対応した活動を展開し、東アジア全体を覆う形での分業ネットワークの構築過程を加速させている。」と述べ、アジア全体の分業体制づくりに、日本企業が進むべきことを提言している。全アジアの分業体制、合理化、資本輸出の中に、日本の産業構造の転換を位置づけているのである。日本独占資本は、アジアを分業体制で支配し、EU(ヨーロッパ連合)、NAFTA(北米自由貿易協定)に対抗せんとしているのである。

このことは何を意味するか。アジア各国の開発、独裁を支援し、貧富の差を拡大し、環境破壊をすすめる。同時に、日本の労働者の大量失業、合理化、農業の崩壊、国土の破壊をもたらしことになる。我々は座してこの攻撃に屈し、血の一滴まで吸いとられるか、立つてたたかうか、その岐路に立たされている。

日経連流、「産業構造転換」を許すな

巨大資本、官僚、自民、新進党が破滅の道をすすみ、社会党、労組中央幹部のほとんどが、これにまきこまれていのはわからないことではない。しかし、わが味方の陣営内部にも、「この産業構造の転換は止むを得ない」とし、その流れの中で、労働者の生活と権利を守る道を求めるとの主張が散見する。このアヤマリを早急に克服し、合理化に苦しむ職場労働者にたたかいの方向を明示するのが、「護憲懇談会」をはじめ、流れに抗して、立ち上りつつある諸組織、指導部の任務ではなからうか。

いま、日本の労働者、勤労国民にとって、必要なことは「悪魔のサイクル」を立ち切ることである。貿易依存の産業構造を労働者、国民のために転換することである。自動車、

電機、機械等、日本の主力産業の異状な合理化、貿易拡大により、不況下の今日においても、貿易黒字は拡大し、G7の政治的介入によっても円高は転換できず：「高止まり」している。

そのため「円」は海外では、強いが、国内では弱く、消費物価は、先進資本主義国最高であり、土地を除外しても生活水準は二分の一に近い。過労死に至るまで働き、うさぎ小屋に住んでいる日本人に日本訪問のアメリカ、フランス人はその貧しさに驚くのが常である。

まづ、労働者の賃金をあげ、勤労諸国民の実質生活水準を、先進資本主義国なみに引き上げねばならない。このことにより、内需は拡大し、貿易依存の体質は転換する。「円高」は是正され、貿易の黒字は減少する。アジアに進出してまで、飢餓輸出をまさちらす必要はない。

この自明の理が、なぜ追求されないのだろうか。たたかひの主体労働者、労働運動、労働者の闘争が潰滅しているからである。個別資本は全世界的の激しい競争にさらされている。賃上げを許容した企業はたちまち敗者となる。このままでは「悪魔のサイクル」はゆきつくところまですすむ以外にない。

これをさえぎるものは、労働者のたたかひ、しかも産業別統一闘争、労働者の横断的闘争以外にない。これをなすとげるとは、現状をみれば不可能に近いと思う人が多い。しかし、そんなことはない。敵の弱点を正確に分析し、たたかひの展望と戦略を明確にして立ち上れば、質は量に転じ、急速にたたかひは前進する。大衆運動の原則に確信をもち、労働運動再生の道筋を考えてみよう。

企業別労働組合の克服―電産

総資本と対決して、一步も引かなかつた総評が、かくも無惨に崩壊して連合に席をゆづつた最大の要因は、企業別組合を克服できなかったからに外ならない。いま、日経連報告は、日本の経営の三種の神器、企業別組合、生涯雇用、年功序列賃金のうち、企業別組合のみのこし、あと二つは切り捨てることを提示している。生涯雇用、年功序列は壊しても、企業内組合さええのこせば、労働者支配は貫徹できると考えているのである。

ヨーロッパ、アメリカの労働組合はクラフトユニオン、職種別横断的組合を、その原型としてきた。それ故に、サッチャリズム、レガノミックスの新自由主義の熾烈な攻撃にも耐えて、抵抗の火をたやすことはない。日本でも明治・大正期、横断的組合は存在した。しかし、天皇制下の激しい強圧により、戦前労働組合は潰滅し、戦後にその遺産を伝えることはできなかつた。一九四五年敗戦以降降生れた労働組合は産別会議も含めて企業別組合の連合体にすぎない。

この中で、ただひとつ、不完全ながら、電気産業労働組合のみ、企業の枠を乗りこえ単一体を形成し、産別会議の中核となり、占領下の労働運動をたたかってきた。

当時、全国九配電会社が変電、配電業務を行い、全国一本の日本発送電が、発電送電を行っていた。「電産」は電気事業に働く全労働者が、個人として、組合加入資格をもち、中央執行部が加入、脱退、統制処分権限をもつ単一体である。電気料金は、各社異なり、事業会計は完全に独立していた。しかし、電産は、単一体としての統一闘争により、全組合員単一の賃金労働条件を獲得していた。特に四七年十月闘争により、職能、身分給

を全廃させ、生活給を基本にした「電産賃金体系」を獲得したことは、画期的なことであった。

この賃金体系は、「電産型」と称せられ、急速に各労働組合に拡大してゆく。しかし、企業別組合から、横断的単一体に脱皮することはできず、わづかに海員組合のみ、企業別を脱却したにすぎなかった。

しかし、この電産も、五十年、朝鮮戦争の勃発と共に、集中弾圧を受け、活動家二千余名がレッド・パーチされた。翌五一年、日発は九分割され、全国九電力会社が設立される。パーチに手を貸した「民同派」は左右に分裂し、左派が指導権を握り、五二年、労働法改悪に抗し、炭労と共に長期ストライキをたたかう。会社は企業別労働組合、各電力労働をつくり、輝やける電産は、崩壊する。

この企業別労働組、電労連がいま連合の中心組織として、資本の労働者支配に手を貸している。

階級的労働運動をめざして

一九五〇年、アメリカ占領軍、日本国家権力の方針のもと、民同右派主導で成立した総評は、当然のことながら、企業別組合の連合体である。しかし、急速に進展する戦争の危機は、民同を左右に分裂させ、五二年はやくも左派が指導権を握り、高野事務局長指導のもと平和原則を決定し、民族独立闘争の色彩が強い、地域ぐるみ闘争を展開する。企業別組合は、地域闘争に支援され、日立、東芝、三池等長期闘争をたたかう。

しかし、独占は朝鮮特需により、急速に生産力を拡大し、五五年、GDPは戦前水準に回復、日本生産性本部を設立し、本格的合理化に乗り出す。これに対し総評は、高野に代り、太田・岩井体制を確立し、春闘を提起する。企業別労働組合の闘争は、地球ぐるみ闘争によっても長期闘争は闘えない。産別の横断的統一闘争以外に敵を制することはできない。春闘は、産別横断闘争、統一ストライキを基本にした全労働者、労働組合のたたかいである。

このたたかいは、日常不断の職制とのたたかい、職場闘争を土台とする、産別統一ストライキ、職場闘争のみか、企業別組合の弱点を補強し、階級的労働運動への展望を明らかにする。これが総評指導部、左派のめざした理論、戦略であった。

「五五年体制」の消滅、政界再編成

「五五年体制」の終焉、自社対立の消滅、政界再編、流動化とマスコミはいう。その原因をソ連・東欧の崩壊、米ソ冷戦体制の消滅に求める。これは大きなアヤマリである。冒頭述べたように、事物変化の主要因は、その内部に存在し、外部現象は、副次的なものにすぎない。

五五年体制とは何であったのか。前章で述べたように、日本独占資本の復活、その土台の上に保守合同が成立し、総資本の政治委員会、自民党が生れたのである。これに正面から対決する総評は、この年、春闘を提起し、総資本、総労働のたたかいが火ぶたを切った。

総労働の政治委員会として、左右社会党は合同し、日本社会党が生れた。ここに総労働総資本を代表する政党、社会党、自民党対決の構図が生れたのである。

その後、一九八〇年代まで、社会党、自民党は、それぞれ、総評、経団連Ⅱ日経連を代表し、政治闘争をすすめてきた。社会党は、労組依存体質を脱却できず、指導性を発揮することは、ほとんどできなかった。事実、社会党の盛衰は、総評の盛衰に敏感に左右され、当然議員数も、総評大衆闘争の高揚、低落に比例していた。

したがって、八六年、総評の終焉、連合の成立は、社会党の終焉を意味するものであった。このとき、社会党中央幹部が、連合の成立を喜び、その支援を決定したことは、自殺行為であった。八九年連合が成立してから六年、いま社会党が消滅することは当然の成りゆきとみなければならぬ。

社会党の消滅に抗し、護憲、平和を貫こうとする「護憲懇談会」は、そのたたかいを上部構造、政治闘争に限定するならば、その将来はない。土台となる労働者、労働組合のたかきを第一歩からはじめなければならぬ。依存すべき中央労組幹部はほとんどない。しかし、労働者は存在する。彼等は合理化に苦しみ、配転、首切りにおびえている。頼るべき組織はない。この労働者のたたかいをどう組織するかは、「護憲懇談会」の将来だけではなく、日本の将来を決定する。

一方、独占資本の側はどうなるのか。日本資本主義のゆきづまり、危機克服をめぐって、保守勢力は、自民、新進党に分裂した。社会党中央の指向する新党も含めて、これらのブルジョア政党が、どのような形をとるのかは、経済構造の危機克服のたたかい、具体的には産業構造再編の動向によって、決定されてゆく。

以上述べたように「政界再編成」とは、日本資本主義の変貌、危機をめぐっての下部構造の再編により生れたものである。この点をしっかりとらみつめ、労働者、労働組合の新たなたたかいの組織化が我々の主要任務である。

職場闘争の否定、政策転換闘争

はなしを、前々章にかえし、企業別労働組合連合体・総評を、統一ストライキと、職場闘争により補強し、階級的労働組合を指向した、闘いはどのようにすすんできたかを分析する。

当時の日経連の記録をみると、敵が最も恐れたのは、統一ストライキよりも、職場闘争であった。職場における日常闘争、資本の職場末端組織の職制の機能麻痺を、彼等は「革命の予行演習」と記し、恐れ、その対策を研究している。職場闘争こそ、企業別組合を階級的に強化する「カナメ」であった。

五七年、総評は「組織綱領草案」を全組織におろした。この草案の中心、職場闘争は内難闘争をたたかった私鉄北陸鉄道労組、炭労、三池労組を原型とするものであった。

一九五九年、敵は総資本をあげて、三池労組に攻撃を加え、総評は総労働でこれと対決した。しかし、たたかいは中労委の提示した千八百余名の指令解雇受諾で終結した。総評は三池闘争の敗北を契機に方針を変え、職場闘争を否定し、政策転換闘争に転換した。総評内部でも激しい意見の対立はあったが、太田議長指導の方針転換は重大なアヤマリであった。この後総評は、ヨーロッパなみの賃金をスローガンに、春闘をたたかかってゆくことになるが、職場闘争を欠落させた春闘は、日本のフォーデズムにとりこまれ、高度成長を支える役割りになうことになる。

(坂牛哲郎・つづく)

空の安全は大丈夫？

——アルバイトスチュワーデスの問題点——

今年、日経連から新・日本の経営システム等研究プロジェクト報告がとりまとめられ発表された。この報告は新たな視点からあらためて今後の企業経営のあり方を検討したものである。雇用システムでは高学歴・高年齢・ホワイトカラー職種・パートタイム労働者・外国人労働者が新しいタイプの雇用システムをうみだすとしているが、企業の求める人材と従業員の意識がマッチするような雇用形態を用意して従業員を適切に処遇し、さらに経営環境の変化に応じてどのような従業員が何人必要なのかの考えに立って対応が必要となっている。

管理職・専門職の見直し、目標管理で自己管理させチャレンジさせるなど管理職ユニオン設案書記長の講義と照らし合わせると、今後の資本の雇用調整の名を借りた首切りが見えてくる。四〇歳前半には本人の専門能力、職務遂行能力、対人関係などを自己診断させ自己の弱み強みを自覚させ意識の改革をすることとなっている。J R会社移行にともないいったん全員解雇、あらたに就業規則を決めて労働者に押しつけてきた攻撃は、今日の資本の労務管理の象徴的な企業として君臨させている。

(編集責任は編集部にあります)

客室乗務員(スチュワーデス)の仕事は八年やっています。

バブルがはじけた段階で各企業でリストラがうちだされたが、航空においても人件費を削っていく打開策がだされました。この筆頭にあげられたのがアルバイトスチュワーデス問題でした。

客室乗務員の仕事がどのようなものなのかお話しします。外国ではエアホステスと言われているからお客様の目に触れるところではお茶を出したり、おしほりを出したりが乗務の一連に思われていますが、入社してから三カ月から四カ月のあいだ訓練をうけます。内容はスチュワーデス業務のほかに保安要員であることの教育をうけます。救急看護の勉強、航空気象、機体の勉強などをし一人前のスチュワーデスになっていきます。

地上で座学でうける訓練をいくら受けても、いくら重ねても先輩にはかなわない部分があるわけで、初めて飛行機に乗ったときにある先輩が「今日は右側のエンジンの様子がちがう」と言ったんです。私は判りませんが航空機関士が客室までできて音を聞くのと、フライトには異常はないが地上に下りてから時間をかけて点検すべきだとの経験もしています。経験がものを言う職場であると感じてきました。

スチュワーデスは保安要員

国際民間航空条約のなかに「客室乗務員の主たる業務は保安であることを各国の法律は明記せよ」「この保安能力を維持するために、緊急脱出訓練を年に最低一回は実施する」という文言で条文が定められています。ライセンス制を確立して一つの専門職であるとしている国もあります。日本においては「乗客の安全を確保することが主任務」と簡単に航空法規で定められているにすぎません。

そうした中で客室乗務員はアルバイトでよいのではないかと、世論も会社も訓練さえすれば大丈夫であるとの話になっていったと思います。自分たちの今までの乗務を振り返って専門職であるとの自信と自覚をもつように指導などしてきました。

飛行機に乗っていると事故などは無いだろうと思われませんが、自動車事故などは日常茶飯事に起きていますし、歩いていても事故に遭うこともあります。航空機の場合は回数は少ないのですが事故を起こしたときの代償は大きなもので、一〇〇名から最大五〇〇名を乗せて飛んでいるわけですから大きな打撃を与える特殊性があります。組合としては事故例をもとに「どうしたら防げるのか。どうしたら訓練をいかにさせるのか」を常に考えて安全要求などしています。

花巻空港事故（一九九二年六月）は滑走路におりたときに右側のエンジンが滑走路にすれ、燃料が漏れ、火が回って全焼した事故でした。乗客七四名、客室乗務員三名、機長・副操縦士二名、乗客・乗員は無事に脱出しましたが、事故が起きて着陸した場合はドアなどが曲がってしまつて通常どおり開かないときがあります。この時は幸いにして左側のドアは全部オープンできました。乗客の方がビデオを録っていました。客室乗務員は後ろのほうから「まだ、座っていて、立たないで、動かないで」と再三言っているが、私たちは訓練のなかで「飛行機が完全に止まるまでは行動してはいけない」と教育されているんです。乗客のなかに右側の脱出口に手をかけたそうですが、いち早く逃げたいのでしょう。火の吹いていた方のドアに手をかけていたそうです。飛行機が完全に止まっても私たちの判断だけでドアを開けてはいけないことになっています。

飛行機が停止して脱出するときになって、自分のお土産・荷物を全部取り出したそうです。人間は自分の命が助かるとときは財産であると思えました。できるだけお客さんから荷物ははぎ取って逃げてもらったのですが、安全なところに非難してから「あたしの荷物どうしてくれるの」と言われたそうです。

機長と副操縦士は現在起訴をされていますのでラインには乗っていませんが、会社は事故が起きたときに誰かのせいにしたいのですが、そうしたときに組合って本当にあったかいなと思います。

米運輸安全委員会の協定などは厳しくされていますが、「より実態的な訓練をかさねれば今の航空機事故は最小限に防げることができのだ」との勧告をだしました。各国とも訓練の中身がかわってきていますが、なにしろお金のかかることですから出来てはいません。

二カ月間のあいだに二回の飛行機事故を経験した方が、「大切なのは実際の乗務の経験です」と繰り返し言っています。机上だけの頭に覚えるだけの勉強ではなく、身体で覚えていきなさいと言っています。教訓にして引き継いで行きたいと思っています。

スケジュールデスの勤務実態

新入社員の採用を二年間凍結しており、日本エアシステムでは全国客室乗務員は一二〇〇名ほどいますが回りきらない状況になっています。

空白の二年間で年休の取得や生理休暇もまったく取られなくなりました。乗務時間も延びているデータがでています。組合で要求してきましたが組合だけが強くなつてもしかたがない、組合員の一人ひとりが「協定違反である」との訴えがもっていれば強いものはな

いと思っっている。

勤務は基本的に三日働いて二日休み、三日働いて一日休みが続く勤務形態になっています。急病人がでてフライトができなくなるなどの変更がかなりある。夕方の五時半から六時のあいだに「明日の勤務に変更がないのか」と会社と連絡する珍しい取り扱いになっています。最高一日四回の着陸、地方都市を二往復、勤務時間は一〇時間であれば運用可能で飛ばすことができます。地方都市に月に平均八泊し、天気や飛行機の関係でのびることもあります。早朝三時に家をでて最終で着けば夜中零時をまわってしまふ勤務もあります。これでは人間的な社会生活ができないとの訴えが大きくなっています。

「休憩時間がありません」ので折り返しの時間の四五分から三五分のあいだに食事、次の準備・機内の清掃を手伝うこともあり、上空に行つて乗客へのサービスが終わつた段階で台所で立つて食べている現状です。

飛行機のなかの環境は低気圧、低酸素、低湿度、静電気、放射線被爆、気象の急激な変化、長時間の立ち作業に衆人監視などです。私たちの座るシートは乗客の方に向いていますので、何十人も乗客がいつせいに目を向けられるのがほとんどで、ストレスもたまり会社へ投書する客もいてセクハラめいたものから個人への中傷、解決しづらいクレームがふえています。

JAS国際線はソウル便だけなのですが、徹夜乗務や時差をプールで泳いで疲れさせるなど、各自工夫しながらお昼から九時まででねているとか健康阻害を訴える人もふえています。

最近結婚し子供を生んでも辞めない「働きつづけたい」女性がふえています。約三〇〇人くらいが既婚者であり、ママさんスチュワーデスも全国で二〇人ちかく働いています。日本航空では一〇人に一人はママさんです。憧れの仕事ですが長く働ける仕事であると感じています。しかし健康阻害もあり異常出産する人も多く、一年くらいで一〇名くらいいます。機内の環境は特別で労働条件なり自分たちの権利がまもられなくなるとどっかに歪みがあると感じています。

客室乗務員の職場は三〇歳定年であったが、いまは六〇歳定年になっています。マスクミなどではパイロットとスチュワーデスのタクシー送迎が問題になっていますが、送迎がないと会社に行けない時間のときもあり、勤務の内容が濃いものについては自宅までの完全送迎をする要求を一〇年間あげ勝ち取ってきた権利です。四から五年前までは航空は華やかな業種と言われていたのですが、労資協調路線、会社側の組合の方向にはしつた組合もありまして、産別で労働条件をいっしょにあげていこうとなつていません。

総アルバイトなど打ち出されて下請け・孫請けで労働条件はさらに悪くなる状況になっていますが、営業・予約・カウンター・客室乗務員・パイロット・整備・運行にたずさわっているなどのセクションがあります。どこが欠けても飛行機は飛ばない。相互理解をたかめてみんなで前進させていく、要求をみんなが上げていく、隣の航空会社は敵ではなく仲間であり、航空の労働条件をあげ航空の安全を守ることによって利用する客のためにもなる、働くものの連帯が深まることになるとの感覚で闘ってきたのですが、そのような状況には今はなつていません。

アルバイトスチュワード問題

九四年六月、運輸省の諮問機関である航空審議会でもコスト削減から打ち出されました。マスコミもこぞって労働条件が良すぎる、賃金が高すぎるなど書き出したのがこのころです。会社はどんどんストラする、スチュワードをアルバイト化していく、日本航空が契約スチュワードを募集しました。この時、アルバイトでできるわけがない、アルバイトにしたところでどれ位の経費が削減できるのか、四億から五億をうかせるためにアルバイトにしなければならぬ理由について交渉しました。日本エアシステムは二三〇〇億の資本金の会社ですが、日経連が言っている雇用の流動化（正社員・専門職・雇用柔軟型）にアルバイトスチュワードはあてはまっていなかったのです。

これでは会社と交渉しているだけではだめで、日経連や国の政策がネックにあるからには私たちだけでやることではないと、広くこの問題を知っていただくともに利用者や他の労働組合の方々に知っていただきたいと運動をはじめました。職場内の運動は討議をおこない私たちの職場を総アルバイト化したいのだ、雇用柔軟型なのだと訴えてきました。職場新聞は一〇〇部、月二回の街頭ビラ、デモ行進、マスコミへ出向いていって本質を訴えました。労働省・運輸省との交渉、JAL客乗組合と手を組み参議院予算委員会への傍聴などありとあらゆる取り組みをしてきました。「殴る、蹴る以外のことは何でもしていから」と自分たちの職場を守ること、国や日経連の方針に対して「NO」という労働者の立場で訴えてきました。

制度の問題点

会社としては①一年ごとの契約で三年まで、三年後に辞めてもらうことでしたが、短期雇用形態では経験の蓄積、伝承ができない。安全に直面している。②期限付きの雇用は若年定年制の復活になる。③三年後に条件付きで正社員化、長すぎる試用期間である。④同一労働・同一賃金に原則に違反している。⑤労働条件の差は乗務員間のコーディネートにも影響がでる。

「小さいころからの憧れでした、賃金が悪くても労働条件が悪くても飛びたいんです」と言っていたのですが、三カ月たって「同じ仕事をして労働条件が違うのはおかしいですね」と彼女たちの口からでるようになりました。

昨年末に年末闘争のときに持っていた争議権を留保したい旨の提案が中央執行委員会からあり、争議権を背景に会社側との団体交渉をおこなってきた。

養成が終わりラインへ乗り込むときに五日間の報告書をあげることで、一人前のスチュワードとして乗務することになるのですが、その報告書をあげない闘争を行いました。前進は八〇〇円の時給を一二〇〇円にし、送迎制度を九〇〇〇円をめどに行う、三年後全員が正社員になることを会社に明確化させました。制度の見直しを一年ごとに行う。雇用柔軟型は定期昇給がないのですが入社二年以降は労働条件を検討させることを約束させました。

これで納得いかなかったので、二月三日と二四日に争議に突入しました。職場内では混乱もありましたが、どちらが正しいのか見きわめる力がついていたと思います。労働組合に対する結集度・協力などが争議をとおして変わってきていますので、より身近な労働組合

になれたと確信もっています。
派遣法のなかで一六種が派遣をしてはならない業種に指定され客室乗務員も適用になっていますが、航空会社三社が適用の除外を運輸省に求めていたのを断念したようです。

安全で安心して働ける職場づくりへ

JALでは身体や家庭の事情などで一〇年あまり国内線専門に乗務してきた客室乗務員を国際線にもどす提案がされました。一八〇名が国際線に移りましたが全員が辞めることなく、戻れる運動をすることで頑張っています。今まで持っていた協定を破棄してどんな勤務でも組めるような状態で日本航空は飛ばしているので、操縦士も着陸寸前に意識をうしなってしまう（マイクロスリープ）ことも報告されています。

アルバイトスチュワーデスを組合に加入させる話をしています。一〇〇%加入した時点で会社にオープンしていきたい。四期一三一名の方が一緒に飛んでいるが、一九九七年までの採用計画がだされていまして、JASは四二〇名、JALは一〇〇〇名、ANAでは一二〇〇名のアルバイトスチュワーデスの導入を考えています。再来年には客室乗務員の全体の三分の一になってしまおうので、労働組合に全員加入させる体制でやっていきたいと思っています。組合に加入することが一年後の継続や三年後の正社員になることに支障があるのではないかの思いなどもできています。

私も組合役員も五年になり居心地がいいところになっています。労働組合が好きでやっています。しよせん労働者であることを忘れずに労働条件と生活をまもって、隣の人の痛みがわかるような人間になっていきたいと思っています。

◇投稿◇

向坂逸郎先生の思い出

今から約三十五年前の頃でした。私が東京の零細企業で、铸物の木型職人で働いた頃のことです。偶然のことから社会主義協会の活動家と知り合って、協会の学習会にさそわれました。学習会には向坂先生、当時東京大学教授相原茂先生、労働組合運動講師では、太田薫、岩井章氏等、今にして思えば、一流の講師の人達でした。

そして、今でも強烈な印象に残っていることは、先生が、社会主義運動をやる者は、やせがまんが必要であるといわれたことです。

私は先生のように、社会主義運動の、鉄の意思をもちあわせてはいません。お金は欲しいし、うまい物は食べたいし、女性に対しては、男の感情が湧きます。ですから私は、人一倍に欲の深い人間だいつも反省しています。

ですから私の社会主義運動は、なんとかのひとつおぼえて、やせがまんの連続でした。私が今迄に、大きなあやまちなくできたことは、先生のやせがまんの教えのおかげのためものと感謝しています。

それから先生は、『資本論』は、労働者のために書いてあるのだから、労働者が読むことが絶対に必要であることを力説されました。私はその後群馬の松井田に来て、安中、松井田の青年活動家を結集して、労働大学の本をテキストに使って、学習会を約十五年間つづけました。

そしてその活動家達が、安中、松井田の議会、労働運動のリーダーとして活躍しています。私自身は、本来怠け者なので、どちらかといえば、社会主義の本よりも、ついつい、小説をより多く読みふけてしまいました。しかし、先生がなにかの本に書いていたことは、社会主義の本を読むことも大切ですが、よい小説を読むことも、社会主義運動を実践していく上で大切なことだと教えています。

私にとって、小説を読んだことが、社会の実践活動に、また、私の人生観に、はかり知れないほどに役に立っていると信じています。特に、島崎藤村、夏目漱石の小説は、今でも時々読み返しています。

私が途中で投げだした本が二つあります。『資本論』と、トルストイの『戦争と平和』です。もう私は六五歳です。『戦争と平和』を読み通す気力がなくなりました。今は太宰治の名作『津軽』を時たま読んでいます。私は現在年金生活で、暇がたっぷりあるので、酒ばかり飲んで暮しています。友人達が心配して、酒もほどほどにと注意してくれています。有難いことです。

向坂先生は、酒もたばこもたしまなかつたようですが、私は人生にとって、酒は大変楽しいと思っっているのです。先生ごめんなさいと言うしかありません。(ぐんま 富山 実)

◇ 読者からのおたより ◇

「護憲懇談会」会合開かる 十月二日(日)午後一時より徳島で、四国四県の有志、岡崎ひろみ代議士らが集い、「護憲懇談会」の話し合いが行なわれました。自己紹介の後、岡崎代議士から全国的な新党反対運動の紹介があった後、四国四県の同志から各県の状況が報告。「護憲の社会党」再建に全力をつくすことが確認されました。(えひめ・M)

編集部より 社会党中央の幹部諸氏はいかに社会党を消し去るかだけに腐心しています。許さない」と全国的とりくみも強まっています。いざ出陣の秋です。

岡崎さん新三区から出馬 護憲社会党は十月十日、総支部・支部代表者会議を開き、複数候補者の擁立をめざすことや岡崎宏美衆議院議員の新三区(神戸市須磨区・垂水区)からの擁立など、総選挙にたいする基本方針を確認、記者発表した。「護憲懇談会」とも連携し、護憲の新党結成をめざすとともに、地域での態勢確立を急ぐことにしている。

(しんぶん護憲)、十月二三日付より)

郵政省の不当解雇は許さぬ! 一九八七年十月三十一日、牟田実(当時全通鹿兒島東支部書記長)さんが、郵政省から国家公務員法第七八条を口実として「分限免職」処分を受けて以来、すでに八年を経ようとしています。この分限免職処分は「権利の全通」路線を職場支部書記長として最も誠実に実践してきた牟田書記長に対する制裁であり、全通運動に対する明らかな弾圧処分です。にもかかわらず、「分限」というかたちをとり、個人の資質の問題、個人的ミスであるかのようにすりかえ労使関係外しをたくらんできたところに、この処分の特徴があります。

現在、第一九回シリーズが終了し、延べ七千名(毎回平均百名超)を超える力強い傍聴者を柱に闘われています。現段階は職場の仲間が当時の管理者の虚構の現認書に対し真実を克明に証言し、当局の不当性を明らかにしてきています。人事院側からも、「この事案は異例中の異例というべき長期になっています」と言っていますが、私たちこ

そ長期を望んでいません。しかし、郵政省の分限免職処分の不当性を明確にし解雇撤回を勝ち取り、二度と分限免職処分を出させないためにも、きちんと闘い続けなければなりません。多くの仲間のご支援を。（「分限免職処分撤回闘争ニュース」第一四九号より）

編集部より 激励先は「郵政労働者の人権を守る会」、住所・鹿児島市山下町三三三、鹿児島東郵便局内 全通鹿児島東支部気付」です。

もっと元氣出して山場つこう 世界一を誇るJ.Rが法律違反を繰り返し、無視することによって批判は高まっています。国鉄闘争も佳境的局面に入ったことを、多くのことを激励されましたが、各闘争団は冷静、沈着です。なぜなのだろうか。解雇され五年六ヶ月の間の筆舌に表わすことのできない苦労が、時の情勢に惑わされない試練に耐えてきたことにあるのかも知れない。我々は全面解決要求を掲げ一日も早い解決をめざしている。団員、家族の皆さん、もっと元氣をだして、もっと前面に出て楽しく解決すべき山場をつくろうではないか。自らの手で明日の解決を。（旭川闘争団事務局ニュース）九五・十・一四

「政界再編後を読む」送って 社会党から大臣には送り出したけど「嬉しい気持をかくすことがつらかった」党が結党以来の最低議席になった今、私たちが市職労の仲間や先輩は、「社会党」はどうなるんだろうとの心配があります。北欧型社会でも良い「資本家を認める社会」のではとの意見も言われるなど、「皆なに言いたいことを言わせてみたらどうだろうか」と交流を始めています。活動家仲間には、何かをしなればと「各県で沖繩のような社会大衆党的な地方組織が作られ、そして、それらが各県どうしの連絡組織が作られるといいね!」との悶々とした気持を打ち明け先輩黨員もいます。私自身も何かをしなればならないとの気持ちを持ち続けながら、流されていくようで、そのようなときに通信になっているパンフ紹介の欄で「社会党がなくなる」を知り、これだー!と思っっている今日この頃です。パンフ「社会党がなくなる」を十冊送って下さい。（沖繩・H）

◇ 編集部だより ◇

▽北海道を旅した。北見では国労闘争団の仲間や全林野の仲間にお世話になった。天候は快晴。山にかかった雪と青い空の対比がみごとだった。日本の労働運動や社会主義運動もかくありたいと話し合いました。

▽その中で展望のあるお話。M氏が不動産のチラシと首っぴきで電話にしがみついています。住まい変わるの、とほく。ええとM氏。近くにいたH氏が「Mは今度結婚する」「家探し」と笑いながら答えてくれました。北見闘争団のMさん、おめでとう。独身者がまだ多い全国の仲間たち。M氏につづこうよ。

▽「社会通信」は来年で足かけ二〇年を迎えます。発足が一九七七年の十一月です。長いようであり短かった歳月です。「社会通信」をこんなに支持していただけつづけるとは。

▽発刊は一九七七年の「国会議員への代議員権付与」の時から。今の社会党の現状は、「通信」にもっとがんばれ」といっているようです。気持ちを引き締めがばります。さらに強く、厚いご支援を。

▽「通信」をふやして下さい。そしてご投稿ください。心からのお願いです。